「島の人」とは誰なのか

島出身者によるオートエスノグラフィーを通して

Who Counts as an 'Islander'? Insights Through the Autoethnography of an Island-Born Researcher

鍋内千里

NABEUCHI Chisato

立命館大学大学院　人間科学研究科　博士後期課程

Doctoral Program in Human Science, Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University

Key words: 福江島、ストレンジャー、オートエスノグラフィー

目的

福江島では、進学や就職などの際に島を離れることが選択肢の１つとして位置付けられている。その結果出身者には、島内に留まり居住する者、島外へ移住して生活を続ける者、そして、一度島を離れた後再び島に戻り生活する者が存在する。加えて近年では、島外からの移住者、定期的に島を再訪する者など、多様なかたちで島に関わる人々が存在している。本発表では、島出身者である発表者が福江島でのフィールドワークの過程で経験した戸惑いを出発点として、「島の人」とは誰なのか、島を離れて暮らす出身者はどのように自己を位置づけ、他者から位置づけられているのか明らかにすることを目的とする。

先行研究との関連

これまで、離島に関する研究では、移住者の定住要因や地域社会への参加のあり方が検討されてきた（霜島・大江　2016）。また、国土交通省の調査では、進学、就職など人生上の転機が島からの転出要因になりうることが指摘されている（国土交通省 2013）。これらの研究では、移住者及び定住者にのみ関心が向けられる。しかし、発表者は、繰り返し島を訪れる中で、多様なかたちで島に関わる人々に出会った。

菅野 (2003) はジンメルの社会学をもとに、社会を〈いま・ここでそうなっていること〉という出来事のプロセスにおいてとらえるということとした。さらに、リーペレス（2020）は、複雑な移動歴を持つ人々のライフストーリーを通して、ストレンジャーとしての経験を社会的・文化的文脈の中で分析している。

本発表では、これらの議論を踏まえ、これまで十分に検討されなかった島をめぐる移動の経験の違いによって島に関わる人々が互いをどのように位置づけているかを描くことを試みる。

方法

2025年12月から2026年11月にかけて実施した福江島でのフィールドワークにおける筆者の経験を資料としAEの手法を用いて分析する。AEは、調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法である［アダムス, T.E. ほか　2022］。AEを用いることで、発表者自身のこれまでの経験を振り返るとともに、島に関わる人との対話とリフレクションを通して自己を位置づけ、他者から位置づけられているのか明らかにする。

結果と考察

発表者は、島内での交流の場で「京都の人」として受け入れられ、出身者として認められてないと感じ、落胆を経験した。その一方で、出身者であることを説明して受容を求めながらも、自身の素性を詳しく知られることを避け、曖昧に応答する場面もあった。また、地元で結婚した移住者を、自身のような島外で暮らす出身者よりも「福江の人」と感じる経験から、出自と現在の関係性による福江の人であるという位置づけのずれが意識された。さらに、島内地域の再開発の担い手に地縁があると知った際に発表者が感じた安堵は、発表者自身も人々を区分する基準を持つことへの気づきにつながった。これらの経験から、発表者は自身が出身者として認められることを求める一方で、一定の距離をとろうとすること、そして、自身も地縁の有無を他者の位置づけに活用している可能性が認められた。

謝辞

本研究は、令和８年度五島列島（下五島エリア）ジオパーク活動支援助成を受けました。調査にご協力くださった皆様に感謝申し上げます。

参考文献

国土交通省 2013『平成25年度新しい離島振興施策に関する調査』.

霜島小夜子・大江靖雄　2016『離島移住者の定住志向とその要因』農林業問題研究.

菅野仁　2003『ジンメルつながりの哲学』日本放送出版協会.

トニー・E・アダムス，ステイシー・ホルマン・ジョーンズ，キャロリン・エリス 2022『オートエスノグラフィー　質的研究を再考し、表現するための実践ガイド』　松澤和正・佐藤美保（訳）新曜社.

リーペレス・ファビオ　2020『ストレンジャーの人類学―移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店.